

二〇一九年十月九日 都留文科大学教授 鈴木 武晴

# I 永遠の幸せを予祝する和歌集

泊瀬の朝倉の宮に天の下知らしめす天皇の代 大泊瀬稚  
武天皇

## 天皇の御製歌

一 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡に  
菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の  
国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて 我れこ  
そ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも

三年の春の正月の一日に、因幡の国の庁にして、  
饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事

右の一首は、守大伴宿禰家持作る。

# II 山上憶良「子等を思ふ歌」

子等を思ふ歌一首 并せて序

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、「等しく衆生  
を思ふこと羅睺羅のごとし」と。また、説きたまは  
く、「愛は子に過ぎたることなし」と。

至極の大聖すらに、なほ子を愛したまふ心あり。い  
はむや、世間の蒼生、誰れか子を愛せずあらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俣はゆ い  
づくより 来りしものぞ まなかひに もとなかかりて

安寐し寝さぬ

## 反歌

銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも

一 序

親が子の養育を放棄したり、子を虐待するなどの社会問題をかえる現代社会に響きわたる万葉集の歌がある。巻第五所収山上憶良の「子等を思ふ歌」である。その全体を掲げれば、のとおりのとおり。

子等を思ふ歌一首  
釈迦如来、金口に正に説きたまはく、「等しく衆生を思ふこと、羅睺羅のごとし」と。また、説きたまはく、「愛は子に過ぎたること無し」と。至極の至極に、なほ子を愛したまふ心あり。いはむや、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ  
何処より 来りしものぞ 眼交に もとな懸かりて  
安寐し寝さぬ (八〇二番歌)

万葉集中に「何せむに 我を召すらめや」(巻一六・三八八番歌)。「どうして私をお召しになるのか、そんなはずはない。」意味)の例があつて、上述の②説を支持するかに見える。けれども、「何せむに」の上の文脈は、「おしてるや 難波の小江 廬作り 隠りて居る 葦蟹を 大君召すと」(おしてる 難波入江の葦原に、廬を作つて潜んでいる、この葦蟹めを大君がお召しのこと)の意味)とあり、その一まとまりの意を前提として「何せむに」の疑問提起がなされていること留意しなければならない。

よしゑやし来まさぬ君を何せむにいとはず我は恋ひつつ居らむ  
(巻十一・二二三八番歌)

右の例も、上二句の「ええ、もうどうだつていい。おいでにならないうちのお方なのに」の文意を前提として「何せむに」(どうして)の提起がなされているのである。

また、初句に「何せむに」を据えて、疑問提起を前半に述べ、後半にその前提を記す次のような歌も存在する。

何せむに命をもとな長く欲りせむ 生けりとも我が思ふ妹にやすく逢はななくに  
(巻十一・二二三五八番歌)

何せむに命継ぎけむ我妹子に恋ひぬ前にも死なましものを  
(巻十一・二二三七七番歌)

反歌  
銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも  
(八〇三番歌)

右の歌の、特に反歌八〇三番歌は、子の尊さを詠んだ絶唱として人口に膾炙されている。けれども、その解釈は現在定まっていな。具体的に言えば、「何せむに」を上二句の「銀も金も玉も」の述語として機能する疑問的詠嘆句(助詞「に」は詠嘆性を有する)と捉えて、「銀も金も玉(真珠)もいつたい何になろうぞ。それら勝れた宝も、子の尊さに及ばうか、及びはしないのだ。」と解する説(①説)と、「何せむに」を反語表現と呼応する疑問副詞と見、「勝れる宝」と「子」は同格の関係と捉えて、「銀も金も玉も、どうして勝れた宝である子に及ばうか、及びはしないのだ。」と解する説(②説)が行われているのである。

二 「何せむに」の捉え方

しかし、如上の歌の「何せむに」の用法と当面の八〇三番歌のその用法は、明らかに異なる。八〇三番歌の場合は、「何せむに」の上の表現は「銀も金も玉も」で、係助詞「も」を用いて名詞を列挙し、主語をなす。そして、「何せむに」の疑問詠嘆句を述語として強く押し出していると考えられる。この考察にとつて、憶良自身が後の「男子名は古日に恋ふる歌三首」(巻五・九〇四〜六番歌)の長歌九〇四の冒頭部に、

世の人の 貴び願ふ 七種の 宝も我は 何せむ  
間の人貴び願う七種の宝も私にとっては何になろうぞ  
の意味)

と歌っていることは重要である。「七種の宝も(我は)何せむ」の基本文型は、八〇三番歌の「銀も金も玉も何せむに」(「に」は永嘆性を有する助詞)と同じと言える。同様の例は、憶良歌以外にも次のように見える。

玉敷ける家も何せむ八重葎 覆へる小屋も妹と居りてば  
(巻十一・二八二五番歌)

右の歌の上二句は「玉を敷きつめた立派な家も何になろう。」の意味である。

「名詞+係助詞【も】+何せむ(に)」の形と同様の「名詞

十係助詞『は』十何せむ』の形も、次のように存する。

(卷十五・三六一四番歌)

2 恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲<sup>ほ</sup>りすれ  
(巻四・五六〇番歌)

(卷四·五六〇番歌)

恋ひ死なむ後は何せむ我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ  
(卷十一・二五九二番歌)

(卷十一・二五九二番歌)

C 奥山の真木の板戸を押し開きしゐや出で来ね後は何せむ  
 (巻十一・二五一九番歌)

(卷十一・二五一九番歌)

a と b の歌の上二句は、「恋い焦がれて死んでしまったあと  
 じは何の意味がありません。」の意味。また、c 歌の結句は、  
 「あととはどうなつてもかまうものか。」の意味である。

意味である。

念のため、「何せむに」の助詞「に」の詠嘆性について確認しておこう。

助詞「に」の詠嘆性は、

いかにして忘れむものぞ我妹子に恋はまされど忘らえなくに

(卷十一・二五九七番歌)

など、「……なくに」の表現を結句に据える場合に見られるが、当面の八〇三番歌のように、「——せむに」の形で助詞「に」が詠嘆性を有する例として、次の歌を挙げることができる。

どということがありましょうか。」の意味)

歸るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな  
しらたまひり

のように、「――に勝れる」の意で用いられていると考えられる（拙著『テーマ別万葉集』第七章「万葉の親子」）。すなわ

「勝れる宝」は、他の宝に勝っている宝の意と捉えるべきであり、上二句に掲出の「銀」「金」「玉」を統合的に言い換へた表現と見るのが自然である。

日本紀 三の「補注17の五」に

黄金産出を、三宝を始め天神地祇、歴代天皇の靈等が聖武の大仏造営の熱意に感應し賜わた、大瑞としての宝との観念による改元。

一の第五句の「子」と同格と捉えて「勝れる宝（の）子に及か  
ずや」と解する説（②説）は矛盾をはらんでいると言える。  
げなら、「子」を「勝れる宝」と比較絶賛した以上、「子に  
かかめやも」と比較絶賛を繰り返す必要はないからである。

とあり、孝謙天皇改元の「天平勝宝」の「勝宝」が他の宝に勝る宝の意で、陸奥国貢上の黄金に拠る言葉であることは明らかである。

「勝れる宝」は、先述の山上憶良の「男子名は古日に恋ふる  
の長歌九つ四の言頭部の「世の人の 貴び願ふ 七種の宝」

この「勝宝」の例は、当該の八〇三番歌の「勝れる宝」を上二句の高貴な宝である「銀」「金」「玉」の統合的換言と捉

四 八〇三番歌の応用歌

え、①説、②説以外の「銀も金も玉も、どうして勝れた宝  
言えよう」と解する説は論外と言える。

前節の考察に繼いで、八〇三番歌を享受し応用した歌に考察の筆を及ぼそう。

「天平勝宝」の「勝宝」の語である。（拙著『甲斐 万葉の譜』第67節）。

筑前国守山上憶良の「子等を思ふ歌」を享受した大宰帥  
 大伴旅人は、その反歌八〇三番歌を応用して、「酒を讀むる歌」

「天平勝宝」は、聖武天皇が天平二十一年（七九四年）の二に陸奥の国から黄金が貢上されたことに基づいて四月に「天感宝」と改元したのを、聖武天皇の譲位後に即位した孝謙天皇が七月二日に改めたものである。

あたひ  
価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも

この「天平感宝」への改元について、新日本古典文学大系『続

(三四五番歌)

夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに及かめやも  
(二四六番歌)

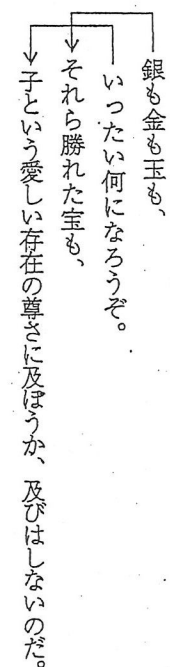
右の歌の「価なき宝」(値のつけようがないほど貴い宝珠)  
「夜光る玉」(夜光る貴い玉)の表現は、言われているよう  
「法華経」などの仏典の「無価宝珠」や、「文選」などの  
「夜光珠」を参照しての表現と認められるけれども、そ  
は旅人が憶良の八〇三番歌の「勝れる宝」の表現を強く意識  
にことに立脚する所作と見て狂いはなからう。

また、旅人歌の構成に留意すると、三四五番歌は、「価なき  
は」「一杯の濁れる酒にあにまさめやも」という構成であり、  
四六番歌も同様に、「夜光る玉」は「酒飲みて心を遣るにあ  
及かめやも」という構成であるとわかる。このことから、旅  
が憶良の八〇三番歌の「勝れる宝」の表現のみならず、歌の下  
の「勝れる宝」に及かめやも」の構成をも意識して詠み成  
へことが明らかになる。

### 五 結語

以上、「二」「四」節の、諸事例に基づく考察から、憶良  
八〇三番歌は、その上三句が第一句二句の「銀も金も玉も」  
主語、第三句の疑問的詠嘆句「何せむに」を述語として、子  
則にしたときは高貴な宝も無益なものとなることを説き、下  
句が、「銀も金も玉も」の総括的換言表現の第四句「勝れる

宝」を主語とし、第五句「子に及かめやも」の反語表現によつ  
て子の尊さを強く響かせていると言えるのである。一首の解釈  
は、歌の構成と表現の対応(文脈表現流下型構成対応と言える)  
をわかりやすく示して記せば、次のようになる。



(二〇一三(平成二十五)年十月三十日)

- (注)  
1, 二説それぞれの支持具相は大方の把握するところ。よつ  
て、ここに挙げ記すことはしない。

## Ⅲ 大伴家持春愁絶唱三首

### 二十三日に、興に依りて作る歌二首

四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも  
我がやどのい笹群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

### 二十五日に作る歌一首

四二  
四三  
四四  
四五  
うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし  
思へば

春日遅々にして、鶺鴒正に啼く。悽惻の意、  
歌にあらずしては撥ひかたきのみ。よりて、こ  
の歌を作り、もちて締緒を展ぶ。ただし、この  
巻の中に作者の名字を偁はずして、ただ、年月、  
所処、縁起のみを録せるは、皆大伴宿禰家持が  
裁作る歌詞なり。

IV 山部赤人の「富士の山を望る歌」

三七 山部宿禰赤人、富士の山を望る歌一首 并せて短歌  
天地の、分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる  
富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影  
も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはば  
かり 時じくぞ 雪は降りける 語り告げ 言ひ継ぎ行  
かむ 富士の高嶺は

反歌

三七 田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は  
降りける

高橋虫麻呂の「富士の山を詠む歌」

富士の山を詠む歌一首 并せて短歌

三九 なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と うち  
ごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は 天雲  
も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる  
火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ 言ひも  
得ず 名付けも知らず くすしくも います神かも せ  
の海と 名付けてあるも その山の 堤める海ぞ 富士  
川と 人の渡るも その山の 水のたぎちぞ 日の本の  
大和の国の 鎮めとも います神かも 宝とも なれ  
る山かも 駿河なる 富士の高嶺は 見れど飽かぬかも

反歌

三三 富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜  
降りけり  
三三 富士の嶺を高め畏み天雲もい行きはばかりたなびくもの  
を

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。  
類をもちてここに載す。

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちこちの 国の御中ゆ 出で立て  
る 富士の高嶺は……

（万葉集卷三・三二九番歌）

山々の排列（並べ方）も吉く幾重にも交なす甲斐の国と、（水の起伏が幾重にも美しく連なり並ぶ）波がうち寄せる駿河の国と、二つの国の聖なる中央から聳え立っている富士の高嶺は、……

解説

『常陸国風土記』行方郡の条の「行細しの国」

「なまよみの甲斐」の原義は「並吉みの交ひ」

高橋虫麻呂歌集所出の虫麻呂作と認定される「富士の山を詠む歌」（卷三・三一九～三二二番歌）の長歌三一九の冒頭部。

「なまよみの甲斐」については、西宮一民『万葉集全注 卷第三』（昭和五十九（一九八四）年三月八日、有斐閣発行）に「生黄泉の交ひ」で「現し国と死者の黄泉国とが交叉した状態にある甲斐」と解く説が、有力視されている。しかし、国名に冠する枕詞は、「玉藻吉し讃岐の国」（卷二・二二〇番歌、立派な藻を産する讃岐の国の意）のように、その国を讚美する言葉となっている。また、『古事記』上巻によれば、現し国と、すこぶる恐ろしいところと認識されていた死者の国の黄泉の国との境界にある国は、「出雲の国」である。よって、「生黄泉の」説は無理が伴うと言える。

では、古代の言葉の用法に照らして、どう捉えるべきか。高橋虫麻呂が編纂にたずさわったと考えられている『常陸国風土記』の「行方郡」の条に「此の地の名を行細しの国と稱ふべし」とあり、土地の景物の排列を讃える「行」（並）に同じ）の語が用いられている。この「並（行）」と同様、「なまよみの」の原文「奈麻余美乃」の「奈麻」は下二段活用他動詞「並」の連用名詞形「並」が音韻変化した「並」を万葉仮名で表記したものと考えられる。同様の音韻変化には「天」↓「天」などがある。「並」は山の排列（並べ方）の意味。原文「余美」は讚美の形容詞「吉し」の語幹「吉」に名詞化する接尾語「み」が付いた「吉み」を万葉仮名で表したものと考えられる。「吉み」は、「吉いところ」「すばらしいところ」の意味。形容詞語幹＋接尾語「み」に格助詞「の」＋名詞が下接した例に「淨みの宮」（卷二・一六七番歌）、「清みの川」（卷三・四三七番歌）がある。こうして、「なまよみの」は「並吉みの」で、「山の排列（並べ方）のすばらしいところの」の意味と捉えられる。

「並吉みの」が冠する「甲斐」（原文も同じ）は、先掲『全注 卷第三』に説くように、上二段活用動詞「交ふ」の連用名詞形「交ひ」と捉えるのが、上代特殊仮名遣の用法にも合致して妥当。ただし、『全注』の説く、現し国と黄泉国の交叉の意ではない。「交ひ」は山々が幾重にも交叉し（重なりあい）ながら連なり並ぶことを表すと捉えるべきである。

以上のことから、「なまよみの甲斐」は「並吉みの交ひ」で、「山々の排列（並べ方）」も吉く幾重にも交ひなす甲斐の国」の意と考えられる。これは、「大和の国」（現奈良県）と同様、美しい山々に囲まれた甲斐の国の吉き景観を讃える表現と言える。

（平成二十（二〇〇八）年二月四日付掲載）

鈴木武晴『甲斐 万葉の歌譜』

平成二十四（二〇一二年）九月二十八日

山梨日日新聞社発行